

五十三歳記念館



直木三十五

直木三十五は「直木賞」にその名を残す作家ですが、直木三十五自身についてはあまりにも知られていません。

直木三十五（本名：植村宗一）は、1891年（明治24年）大阪市南区内安堂寺町に生まれ、この記念館の隣にあった小学校（現在は桃園公園。小学校の塙の一部が今もこの建物にくっついたまま残っている）に通いました。市岡中学、代用教員などを経て早稲田へと進みますが、学費に困って中退。その後出版事業を興したり、雑誌の編集、映画を制作するなど多くの活動を行い、そして時代小説、大衆小説を多作と言える程執筆します。代表作「南国太平記」で一躍人気作家としてその地位を確立した彼ですが、同時に病氣や借金を抱え、無頼で破天荒な人生を走り続けました。そして四三歳という若さでその生涯を閉じます。

翌年、友人である菊池寛らが「大衆文学の歴史を変える貢献」として「直木三十五賞」を設立し、現在まで新人作家の登竜門として「芥川賞」と共に名誉ある賞に位置付けられています。菊池寛は「直木がそのことを知ったら受賞者に、おい、賞をやったんだから分け前を少しよこせ。なんて無茶を言いそうな気がする。」と言ったとか。直木がいかに愛された作家であったかが分かるエピソードです。

大衆文芸とは、表現を平易にし、興味を中心として、そのみにても価値あるものとし、又は、それに包含せしむるに解説的な、人生、人間生活上の問題をもってする物」と言いたいのである。

——直木三十五「大衆文芸作法」より

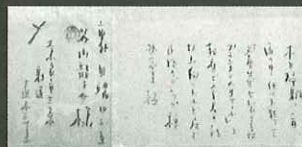
収蔵資料



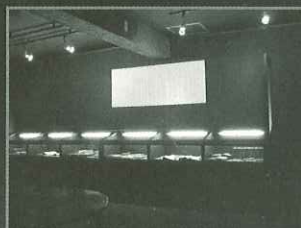
仇討十種
直木三十三
(ブロン社版)



源九郎義経
直木三十五全集
(改造社版)



芥川龍之介宛の書簡（一部）



記念館内部



藝術は短く
貧乏は長し

名前の由来

直木三十五は、そのまま「なおきさんじゅうご」と読みます。「直木」は本名「植村」の「植」の字を分解して作ったものです。「三十五」の方は直木が三十一歳になった時、「直木三十一」とし、自分の年齢に合わせ「三十二」「三十三」と変えていったようです。しかし「三十四」とをばして「三十五」で落ち着きます。（つまり三十三は二年間使用しました。）

本人の記す所によりますと、「三十三で留めておいたが、三三と重なるのは姓名判断上極悪であるという。なるほど余り貧乏が長過ぎる。素人考えから云っても「味噌蔵」だの「散々」だのと通じては縁起でもない。これを「みとみ」と読んで「粋な名だな」という仲居があるに至っては到底女との苦勞断てる暇はあるまいと思われる。一躍四を抜いて三十五になる所以である。」と言うことです。

記念館コンセプト

直木が晩年に自分で設計した家が、現在も横浜の金沢区富岡に残っています。（現在は他人が住んでいます）直木の性格を表したようなこの家は一風変わっており、まず玄関がない、内壁は黒一色で統一され、トイレや浴室には黒いタイルが敷き詰められていたそうです。この記念館ではその家をモチーフとして黒い部屋としました。また臥て書く習性があった直木に則して畳敷きとし、みなさまに直木の視点を感じ、そしてくつろいで頂ける記念館を目指しています。

利用案内

開館時間 11:00~17:00

休館日 毎週水曜日

入場料 ￥200

(小学生以下は￥100)

※直木三十五記念館友の会
「直木倶楽部」が発足しました。

※スペースレンタル
については別紙をご覧ください

● 直木三十五記念館

直木三十五は内安堂寺町に生まれ、
大正末期から昭和初期にかけて活躍した作家で、
現在も直木賞にその名を残しております。
直木ゆかりの地に市民の力で記念館を立ち上げました。
これからも「記念館」という既成の概念にとらわれず
どんどん成長して行く予定です。

記念館設立にご協力頂いた団体

中川企画建設株式会社

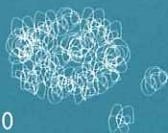
株式会社エクチュアとスタッフ一同

学校法人専本学院／大阪芸術大学

UHA味覚糖株式会社

株式会社マンダム

この他多くの方々のご協力を賜り、
記念館の存する施設「萌」に記銘させて頂いております。
今後とも皆様のご支援をお願い申し上げます。



交通

地下鉄谷町線谷町6丁目2番出口から徒歩2分

地下鉄長堀鶴見緑地線松屋町3番出口より徒歩5分



※専用の駐車場はございません。
近隣のコインパーキングを御利用下さい。

直木三十五記念館

大阪府大阪市中央区谷町6丁目5-26

tel:06-6767-1906

fax:06-6767-1904

<http://www.eonet.ne.jp/~karahoriclub/naoki/>